

印染の可能性を広げて 地域を盛り上げたい

柳分良司

代表取締役 / 製造全般



もっと生の声

Q & A

— 思い出に残るエピソードを教えてください。

地元の郷土芸能である備中神楽の舞台で使う幕の制作依頼を受けたことです。母は、いくつも手掛けていましたが、自分にとっては初めての神楽幕の制作でしたので、イメージなど母に相談しながら作り上げました。この仕事に就いてから、やってみたい仕事の一つでしたから、やっとまかせてもらえたことがとても嬉しかったです。

— 今後、取り組んでみたい、実現したいことはありますか。

海外で開催されている日本のお祭りに関わってみたいです。また、地元である高梁市の良さを伝えられるオリジナル商品の開発と販売も手掛けてみたいです。さらに、普段の仕事で出た半端な生地などを再利用して、SDGsに対応した商品を作りたいとも考えています。

— 将来繊維業界に従事する人へのメッセージをください。

繊維と一括りに言っても中身は様々です。わたしたちの携わる染め物(印染)の仕事は、アイデア次第では、地域の活性化に繋がると思います。また、インターネットで世界が繋がっている今、自分ができること、やってみたいことを発信していけば、それを探している人が必ずいます。若い人たちには自分をどんどん表現してもらいたいですね。



家業である染色業を継いだ柳分さんですが、実は海外で心理学を学び、心理学者か精神科医を目指していたそうです。帰国後、英会話の講師や印刷業界で働きながら日本での大学編入を準備していた頃、お父様が病に伏したため、急遽、家業を継ぐことを決めました。Illustratorを使ったデザインや仕様書作成などの業務は、印刷業界で働いた経験が役に立ちましたが、染めや仕事の段取りなどに関してはゼロからの出発。家業を継いだ当初は、お母さまや工場長から仕事を教わりながら何とかこなしたといいます。

現在では、製造にかかわるほとんどの業務を担当しています。「法被や旗などの版を社員が準備している間に私は染料を調合し、染めの作業に入ります。この染めの作業は、複数人で行うため、息のあった作業が求められます。染め終わったら洗って乾燥させ、その後、縫製担当に仕立ててもらい製品を完成させます。染めの作業は、気温や湿度の影響を受けますから、その日の状況に合わせた染料の調色は今でも神経を使います。」

また、取引先の拡大にも積極的に取り組み、現在の取引先は、家業を継いだ当時の倍を超える数となりました。3年前からは、SNS等も活用し、地元を中心に直請けのお客様を増やすことにも取り組んでいます。「弊社のブログを見た方から「岡山のうらじゃ祭りで本物の法被が着たい」と注文をいただき大変嬉しかったです。」「法被や暖簾、旗、幕作りは必ず人に目にしてもらえる仕事です。お祭りやお店の顔になるものでもありますので、これからもお客様の思いを実現し、喜ばれるものを作り続けていきたいですね。」

